

# 20年の活動総括

フォーラムの活動は、アンケートプレナリーシップ（横浜市職員提案事業）で始まりました。横浜京浜臨海部の緑を拡充する取り組みの一環として2003年9月開始しました。当初は、京浜臨海部企業5地点で、13団体の協力によって始まりました。さて、2012年に発行された報告書「トーンボでつなぐ京浜の森・10年の記録」では、1.企業・市民・専門家・行政の協働によるネットワークの構築、2.専門家の学術的なトーンボ調査による、企業緑地の質的向上と機能の解明、3.協働によるまちづくりモデルの提示と企業活動の評価とモチベーションの向上の3点が成果として確認されています。

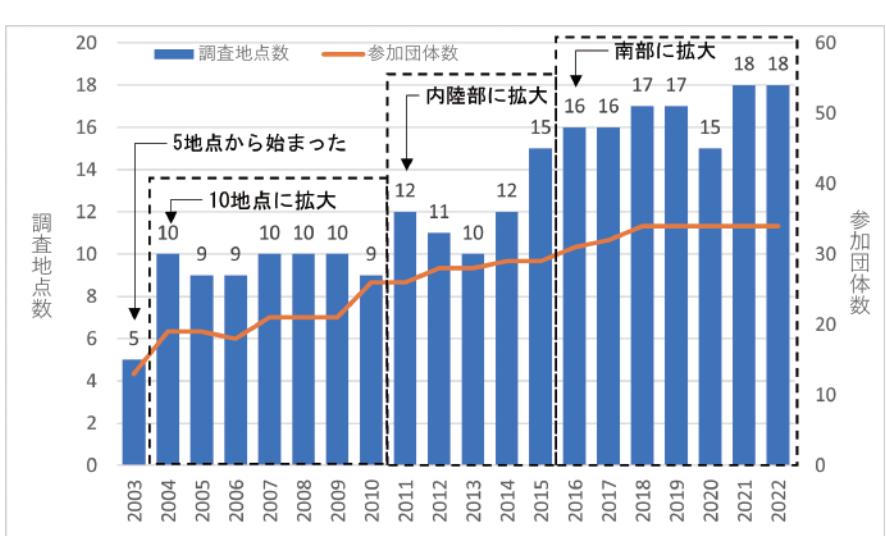
このときに掲げた次の3つの「未来へ向けたビジョン」について考えてみたいと思います。

## 1. ヨコハマトーンボと連携し横浜全域に活動を展開

活動当初5地点だった調査地点も、10年目の2011年に12地点まで広がるとともに鶴見区の内陸部に広がりを見ることができました。そして、2016年からは横浜港を挟んで中区、金沢区へと活動が広がっています。

## 2. 調査の意義を伝え、持続的な活動に

フォーラムでは、活動の意義を伝えるためのPRを報告会やホームページなどで実施しています。10周年記念誌の発行をきっかけに2013年度より報告書を刷新し、科学的な解析を維持しつつ、親しみやすい報告書とすることを心掛けています。



## 4. さらなる活動の普及と組織基盤強化

活動の基盤強化のためには、時代に即した活動のアピールが必要です。昨年のcop15で30by30が批准されたことから、トーンボフォーラムでは30by30アライアンスへの登録、OECMへの参加を目指していきます。これからはフォーラムジーニー（18P）をご覧下さい。

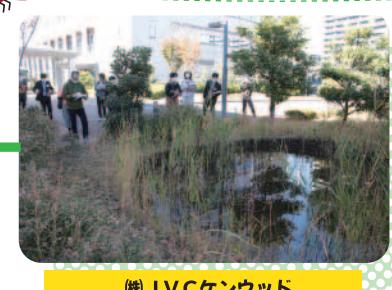
## 3. 活動を担う次世代の育成

トーンボとりの楽しさを子どもたちにも体験してもらいたため、2005年よりトーンボとり大作戦を開始しました。当初はイベントとして年1回程度の開催でした。が、2014年からは入船公園とJFFEトーンボみちで6月から10月の間に月1度開催するようになりました。2017年度からは南部方面に開催の輪が広がり、現在は6箇所で定期開催を行っています。

また、2018年よりジュニア調査員制度をつくり、認定された調査員が大人に混じって調査に参加しています。捕獲能力が高いジュニア調査員の参加は、調査場所の増加と市民活動団体メンバーの高齢化による調査員不足の課題に対しても大きな戦力となっています。

# 企業ビオトープ見学ツアー ～本調査地点7ヶ所をバスで巡りました～

日 時：2022年11月16日 10時～16時30分  
見学先：横浜市神奈川区内・鶴見区内のビオトープ

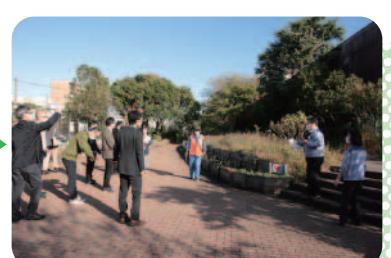


大黒海釣り公園

トンボはドコまで飛ぶかフォーラム20周年記念イベントのひとつとして、「企業ビオトープの新たなる展開」をテーマに、様々なビオトープを見学することで、ツアー参加企業のビオトープ新設及び既設の改善を促すことを目的にツアーを行いました。

参加者は、企業7社9名、行政5名、フォーラム事務局5名の合計19名でした。神奈川区と鶴見区の企業ビオトープ（マツダ、JVC、キリン、JERA、JFE、東芝）と貨物線の森緑道の仮設ビオトープを巡り、最後に環境科学研究所にて、見学のまとめ・ふり返りを行いました。

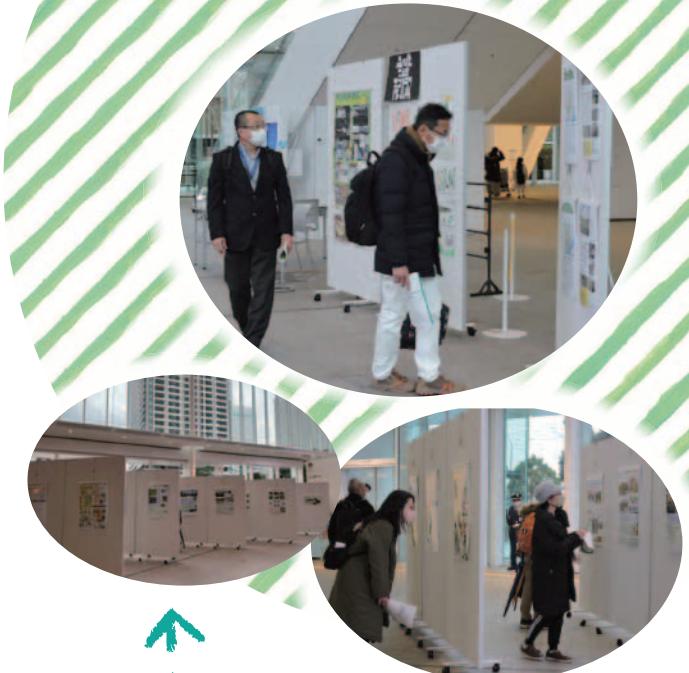
参加者アンケートには、「各ビオトープの特色があり、実際に見学して、いい刺激になつた」といった感想が多く寄せられましたので、今回のテーマである「企業ビオトープの新たな展開」を実現できるよう、引き続き活動してゆきましょう。



## パネル展

1月15日(日)と16日(月)に記念イベントに合わせて、調査地点になっている企業、行政、市民団体、教育機関等の活動紹介やトンボフォーラムに参加している団体の活動紹介、トンボフォーラム20年の取り組みの成果などを掲載したパネルを展示了しました。

詳しくはトンボはドコまで飛ぶかフォーラムのホームページをご覧ください。



## えっ！こんなにいろいろ 身近にいるの？！ 生きもの展

1月15(日)に生きもの展を開催しました。

ニツ池(横浜市鶴見区)で活動しているニツ池プロジェクト、ニツ池こどもエコクラブは爬虫類や両生類、魚類、トンボのヤゴ、トンボの標本を展示し、横浜市緑の協会はタヌキやアライグマ、ハクビシン、タイワンリスの剥製を展示了しました。

横浜市で見られる多くの生きものに触れてもらえて、大好評でした。



# 1日目パネルトークは「親子で生きもの沼にはまりました」というタイトルで行われました

## ●パネリスト

・稻田瑠美子さん(「トンボみちファンクラブ」)

・七里浩志さん(横浜市環境科学研究所)

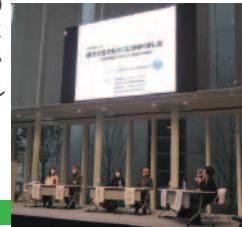
・國師裕紀子さん(二ツ池こどもエコクラ'')

・石川英雄さん(横浜市教育文化研究所)

・ファシリテーター

吉武美保子さん(よこはま里山研究所「NORA」)

●コメントーター 田口正男さん(農学博士)



られました。

そして、お一人とも、好きな生きものを通して親以外のおとなと関わることで、子どもも自分自身も世界が広がり、育ててもらつたという主旨のことを語られたのが印象的でした。ちなみに、國師さんのお子さんも稻田さんのお子さんも、トンボはドコまで飛ぶかフォーラムの「ジュニア調査隊」の一員として、夏の本調査には欠かせない存在となっています(もちろん、お母さん方も)。

一方、七里さんは中学生の男の子と小学生の女の子のお父さんですが、実は沼にはまっているのはお父さんだけ…。お子さんの方は沼に入つても出てきてしまって少しあいでもやはり、おっしゃっていたのが「親が一生懸命引っ張つてもそれだけでは動かない。生きもの好きの同級生や

てくれたりする場があるといいなと思つていた時に出会えたのが、「トンボとり大作戦」でした。そこから「トンボみちファンクラブ」にも通うようになりました。

國師さんは西日本にもいらしたしそうですが、息子さんと

共にいくつかの生きものの関連の活動に精力的に参加。その時にトンボなどの生きものについて教えてもらつていた方に、「横浜に引っ越すなら二ツ池がいいよ」と言われて、その通りにしたことが現在の活動につながつていて、というエピソードも披露されました。そんな息子さんも思春期となりました

が、トンボのことは話してくれるところとで、共通の体験がベースにあり、親が子どもから教わることがあるという関係性はとても良い、と力を込めて話されました。

また、いろいろな問題があるとは思うが、子どもが自由に虫を探つて持ち帰られるようになればいい—そんな未来像も語



先輩後輩、親以外のおとななど、周りの人の力が大事」ということでした。それでも、生きものを通してのいろいろな人の関

わりの大切さが語られました。最近は同級生の影響で、少し沼にはまりそうな兆しが見えるそうです。最終的には生物多様性という言葉も意識されずに、当たり前に生きものがたくさんいて、ふれあえるようになれば、といつ思いも話されました。石川さんは小学校で子どもたちと生きものに関わり、退職後は田んぼや畑で子どもたちと一緒に汗を流しながら、生きものともふれあつています。「沼にはめる方」の立場からのお話をありました。

どんなトンボを獲つても周りのおとなからほめてもらえて、自己肯定感が湧く。自分でスゴイな、トンボってスゴイなど思える実感が、この活動を通じて子どもたちに湧いてくるのだというお話をされました。

また、生きものることを知つてゐるけど実体験が伴わない子どもも多いので、子どもたちと農作業をしながらいろんな生きものと触れ、「食べる」と「自然環境を豊かにしていくこと」が、うまくリンクできるようになればと未来を見つめています。最後に田口先生から、「子どもの頃の体験がきっかけになって世界が拓けてゆく。特に体験しやすいのが生きもので、そのなかのトンボはさらにはいりやすいのではないか」というコメントを頂きました。

吉武さんは、パネリストのみなさんがワックラムとして話せる雰囲気をつくりつつ進行して頂きました。

「生きもののために」「子どものために」を考える」として、横浜の未来が垣間見えてくる—パネリストの方々の経験に打ちされたお話の中に、そのヒントがたくさん散りばめられていたようでした。

## パネルトーク

## トンボから見えてくる地域の未来

2日目のパネルトークは、「トンボから見えてくる地域の未来」をテーマにトンボは「ドコまで飛ぶか」フォーラムの左記メンバーで行った。

## パネリスト(京浜臨海部の北から順)

東芝エネルギーシステムズ株式会社京浜事業所 小熊一史氏

JFEエンジニアリング株式会社横浜本社 中谷猛氏

株式会社JERA横浜火力発電所 森田智久氏

キリンビール株式会社横浜工場 山本武司氏

マツダ株式会社マツダR&Dセンター横浜 大鶴智子氏

株式会社JVCケンウッド 高村直樹氏

株式会社ボリテック・エイデイディ ファシリティーア

井手佳季子氏

横浜市環境創造局みどりアップ推進課担当課長 小田嶋鉄朗氏

## コメントーター

MS&ADインターリスク総研株式会社フェロー 原口真氏

## 今後の活動をより発展させるために

活動の効果が上がってきたことについて、コロナ禍の影響として会社として3年間の中止となつたが、トンボが緑地の生態指標となつており生物多様性を企業として打ち出せる施策となつているとの報告があり、この活動には企業価値を高めていく力があることがわかった。また、生物多样性の活動で市から表彰された企業からは、今後も活動維持のためにそのような支援への依頼があった。OECMへの登録にはそのような効果も期待できる。

また「メンテナー」の原口氏は、TNEFDについて企業の認識が高まつており、これまでの20年間の取り組みをどのように会社の価値に繋げることと、京浜臨海部、横浜市として価値づける必要性を本社、社内にもちかえり議論することを提案した。

これまでの緑地の拡充やフォーラムにかかるわるトンボ調査などについての報告があり、各企業とも活動は定着しており、今後さらに緑を広げていくこと

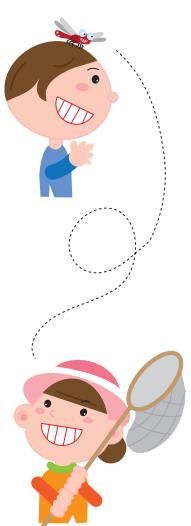


## 目に見えないような苦労話

次に日頃の活動の苦労話や直接目に見えないような活動の効果、職場の方々の反応を聞いた。安全面の配慮として調査活動は猛暑の中で行われることが多く、また天候に影響されることが多いため熱中症対策など調査の安全に力を入れていることが紹介された。また、環境に配慮した活動をより市民の方々に見てもらいつよう、鶴見線の増便で駅に人を呼び込むことができないか、という意見や老朽化した施設の改善が課題であるとの指摘があつた。

が課題であることや、ビオトープが横浜スタジアム3.4個分の広さがあり、手を入れないとクズが生じ茂り木の成長に影響があるので現状はトンボ池の維持管理が中心となつているなどの報告があった。また、緑地整備から16年が経過し、その中の小さな池ではあるが多様な生物が棲むようになった。今後は私道の緑地化等を実施し、活動を更に発展させたいとの地域の未来を見据えた心強い報告があつた。

が課題であることや、ビオトープが横浜スタジアム3.4個分の広さがあり、手を入れないとクズが生じ茂り木の成長に影響があるので現状はトンボ池の維持管理が中心となつているなどの報告があった。また、緑地整備から16年が経過し、その中の小さな池ではあるが多様な生物が棲むようになった。今後は私道の緑地化等を実施し、活動を更に発展させたいとの地域の未来を見据えた心強い報告があつた。



## これらのパネルトークから

ファシリティーアの井手氏は、池の管理手法、鉄道会社や各本社との連携などを提案した。

同じくファシリティーアの小田嶋氏は地道な調査を継続していくことの重要性と、30by30の取り組みにおいてネットワーク式のOECM認定の可能性を指摘した。

また「メンテナー」の原口氏は、TNEFDについて企業の認識が高まつており、これまでの20年間の取り組みをどのように会社の価値に繋げることと、京浜臨海部、横浜市として価値づける必要性を本社、社内にもちかえり議論することを提案した。

今後、京浜臨海部のOECMへの登録を目指すフォーラムの活動により、一層の環境改善が進み、トンボたちが空いっぱいに飛び交う様子が期待されるパネルトークであった。